

機械人形は笑わない

moco(もこ)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——Die Einsamkeit ist ein dich
ter Mantel, und doch friert das
Herz darunter.

Erwin Guido Kolbenheyer

(孤独は厚い外套だ。そして心はその下でこごえているのさ)

最も過酷な戦場。最前線を駆け抜ける艦娘達が所属する、呉鎮守府。海上交通線の安定化に伴い、技術提供を求めて二人のドイツ艦娘が遠路遙々この呉鎮守府へとやってきた。

「——お前の後輩みたいなもんだ。面倒はお前が見ろ」

そのうちの、一人。ドイツの航空母艦である彼女の世話係に任命された私は、それがよもや自身の転機になろうなどということを。まだ、知らずにいたのだ。

——これは、とある泣き虫な赤城さんと、ドイツ航空母艦、グラーフ・ツエツペリンの縁の物語。

他作品であるたった一つの小さな願い、彼は誰時に滲む灯火、双龍、綿津見へ還りてと世界観を共有するお話となっています。単体でも読めなくはないかもしれませんが、所々世界観の説明を端折っていますのでもしかしいたらわかりづらい部分もあるかもしれません。

時系列的にはたった一つの小さな願いの後の呉鎮守府におけるお話となっています。下記注意点についてお読み頂いた上で、もし楽しんで頂けたのなら幸いです。

※フィクションです

※独自設定、オリジナル提督等を多分に含みます

※本編のメインは赤城、グラーフ・ツェツペリンの二人であり、瑞加賀、蒼飛（前作に登場）に関しては少し顔出しする程度になります

※登場人物は誰も死にませんが、轟沈のある世界観です

※ガールズラブタグは念のため

なお同様のものをpixivにて掲載させて頂いております。

後編 前編

目次

33

1

前編

※

日が傾き始め、水平線の向こう側から徐々に滲むように赤く染まりはじめた海上を進む。無意識に帽子を深く被り直していたら、近くにいた駆逐艦の女の子に話しかけられた。

「グラーフさん」

「なんだ？」

「そんなに帽子を深く被って、見えるっばい？」

独特な喋り方をする彼女は、空母と知ると畏まった態度で接して他の駆逐艦とは違い、無邪気に話しかけてくる。最初はその喋り方にも戸惑ったものだが、慣れれば可愛らしいものだ。

「ああ。日差しが、苦手だな」

「眩しいっばい？」

「ちよつとな」

「じゃあ今度からサングラス持ってくればいいっばい！」

海面を踊るように滑りながらこちらに笑いかける彼女のひよんと跳ねた癖っ毛が揺れる。その毛先は夕日に照らされ赤く染まり、そのまま溶け込んでしまいそうなほど柔らかだ。

艦娘。自身も日本が定義する艦娘、のようなものになってしまわう経つが、このように幼い少女達が人類の救世主たる存在として崇められている現状にはどうにも違和感が拭えなかった。

それでも任務ならこなす、それが自身の与えられた役割だから。そして、この幼い外見に惑わされ、侮っていると足元を掬われるということも嫌と言うほどに知っている。艦娘も、深海棲艦も。

『――夜が来るね』

ふいに、無線から上機嫌な声が響く。それにつられて自身の先をゆく今回の旗艦である彼女の後ろ姿を見やった。どこか彼女、川内の身につける長い長いマフラーも楽しげに揺れているように見える。

『そうだな』

『思いつきり夜戦になりますけど、大丈夫なんですよね？』

『ああ、問題ない』

彼女に無線で答えながら、もう一度水平線の先を見やる。

——日が、沈む。

『夜は、私の領分だ。——蹴散らすぞ』

※

「……またこけたんじゃねえか、お前」

「一応、体重は変わってないはずだけど」

元々顔つきの悪い彼であるが、その彼が呆れるように目を細めるとまるでガンを飛ばされているように感じる。だがしかし、長い付き合いである自身にとっては特に気になるものでもなく。

「そう思うならもうちょつと艦娘まわしてくれないか？」

「善処はしている」

お互いに仰々しい役職についてから、中々直接会って話す時間が作れないけれども。全く正反対な性格が逆によかったのか、候補生時代の先輩後輩からお互いに呉鎮守府、横須賀鎮守府の提督になってからも友人関係は続いている。

「まあ、そうだね、うん……」

「舞風やっただろーが」

「……あれは、押し付けたの間違いじゃないの？」

こつちに来たばかりの頃の彼女は、それはひどいものだった。徐々に徐々に、色々な人に支えられて今ではうちに欠かせない大切な仲間の一人となっではいるけれども。

「陽炎型欲しい欲しいってうるさかったのそつちだろ」

「いや、陽炎型っていうか……いや、うん……」

「それにああいうのは俺の手に余る」

「前から思っていたけれど、僕のこと駆け込み寺かなにかだと思っ
てない？」

「うるせえ」

まだ半分も吸っていない煙草をぐしゃりと灰皿に押し付け、また一本取り出す。あ、今日はいつもより機嫌が悪いな、と思いつながら黙って手元のコーヒーを傾ける。

「……相方の才能が飛び抜けていると、どうにもな」

「あー、目立つ娘だよねえ、舞風の元相方さんは」

「呉で役立たずが生き残れるわけねえだろ。それがわからないほど萎縮してるようなやつあな、一旦別の環境にぶち込んだほうがよかったりするもんだ」

「なるほど？　じゃあこれもそういう新しい刺激を呉に与えるために受けたのかい」

「ずず、とコーヒーを啜りながらさつきまで話していた書類について話題を戻す。」

「それもあるが……なにより戦術の幅を広げたくてな」

「夜間航空攻撃、ね」

「ちようどいい打診がドイツからあったことだしな」

「彼女、面白いね。空母なのに夜戦ができるなんて」

「ああ。これを機に夜戦戦力の増強をしたいんだが、な」

「そう、彼にしては歯切れ悪く言葉を切る。」

「なにか、ひつかかる言い方だね」

「……まあな」

ぐしゃり。今度はさつきよりも早く煙草を押し潰す。貧乏性の自身はもつたいないな、と思ってしまうのだけれど、金を使う暇もねえしこんくらいでごちやごちや言うな、と怒られてからは何も言わないことにしている。

「夜の適性が高いやつは、堕ちやすい。……だから、より慎重に事を運ばなければならぬ」

「何に、とはあえて言わない。上層部の一部だけが知っている真実。深海棲艦と、艦娘の関係性。」

「シーソーゲームで負けたら終わりだ。文字通りな」

「……」

「だからこそ、今いる艦娘達を、艦艇の付喪神達をこちら側に繋ぎ止める何かが必要になる」

戦争を知る世代が消えて暫くして突如として現れた深海棲艦。破竹の勢いでその勢力圏をのぼし、人類を恐怖のどん底に陥れた、まご

うことなき人類の敵。

『——ワタシ達は、人を助けるため。……皆を救うために、ここにいます』

その本質は同一にして、それが故に対極の存在。だからこそ救える、だからこそ墮ちる。バランスゲームなのだ、これは。そしてバランスが崩れれば、それは即ち人類の滅亡を意味する。

「目先の勝利で一喜一憂しようが、俺達は危ういバランスのもと生かされているということ常心に心に留めておかねばならない」

「……オカルト嫌いの君はてつきりそういうのは無視してるのかと思ってたよ」

「あ?」

「艦艇の付喪神との対話装置、使用廃止したじゃないか、呉で」

「ああ」

三本目の煙草の煙を吐き出しながら、気だるそうに彼は続けた。

「呉のやつらには必要ないからな」

「そう? 呉こそ必要じゃないか」

「どうせすぐに実戦に投入されて、すぐ馴染む。馴染まなければ死ぬだけだ」

さざりと言い切ってまた次の煙草へと火を灯す。チエーンスモーカーの彼はストレスが溜まると際限なく煙草を吸い続ける。今の彼の秘書艦は、それが嫌でたまらないみたいだけれど。

「……例えば、川内に対する神通のように。夕立に対する由良のように」

「縁ってやつだね」

「そうだ。艦娘にとつての縁ってのはな、セーフティネットだ。強固な縁が、数多くの縁がそいつの拠り所となる」

「そして、深海棲艦との縁が新たな戦端となる」

「……まあ、今はそれはおいとけ」

渋面を作って暫く無言で煙草を味わっていた彼の机から、もうひとつの書類を拾い上げる。

今日は主にこの二件について話し合っていた。一つは、既に受理さ

れたもの。ドイツからの技術提携の打診とそれに伴う艦娘の交換について。今回日本に送られたのは、戦艦と空母が一人ずつ。その娘達の詳細データが載っているもの。そして、もう一つは。

「それで？ ……この娘には誰がそれに当てはまるのかな」

ぱん、と指先の裏で書類を弾く。わかりきつていながら、あえてそう聞いた。艦娘を道具と割りきって扱う彼ではあるが、その癖妙に人と人の縁を繋ぐ勘所が冴えていることは仲間内では有名だ。

そこに記載されていたのは、とある艦娘の新たな改二案。

「……さて、な」

ちらりとこちらに視線を寄越しながら。そう呟いてまた彼は新たな煙草へと手を伸ばすのであった。

※

さらさらさら、とカルテにペンを走らせる音が静かな空間に響き渡る。ここに来て彼女と会話を交わすのが日課のようなものになって久しい。私が着任するよりもずっと前からこの呉鎮守府を陰ながらに支えている大先輩である彼女。職が変わっても彼女はツナギを好んで着込み、その上から白衣をひっかけるといふ独特なスタイルをとっている。

「最近どう？」

ぎ、つと座椅子に深く腰かけてカルテを見ながら世間話をするかのように気さくに彼女が話しかけた。

「そうですね、演習はもう問題ないですし」

「うん」

「出撃も、少しずつ。まだ、ちよつと夜は苦手なんですけど」

「うん。苦手って言えるようになったのは大きな進歩だね」

こちらを振り返る彼女の頭上の鮮やかな緑色のリボンが揺れる。これくらいは女の子らしくしなさいってうるさくて、とは本人談だけれども、案外それを気に入っていることはここにいる皆が知っていることだ。

「新入りちゃんはどうか？ 面倒見てるんでしよう？」

「あ、はい。いい人ですよ」

「日本語ペラペラなんだって？」

「はい、ふふ。ちよつと喋り方が男性的なんですけど」

「へえ？」

「海軍支給の資料で勉強したらしいので、そのせいかもしれないですね。ただ、妙に似合ってます」

『Guten Morgen. 航空母艦、グラーフ・ツェペリンだ。

——貴方がアカギか？』

彼女との初顔合わせ。付け焼き刃のドイツ語でどうにかなるのかしら、と身構えていたら流暢な日本語が彼女の口からついて出て、思わずポカンとしてしまった。少し怪訝そうな顔をした彼女が差し出していた手を慌てて両手でとって握手を返しながら、日本語、お上手ですねえ、としみじみと感想を漏らしたらどこかほっとしたような顔をされたので、もしかしたら通じているかどうか不安があつたのかもしれない。

「まだ私会ってないんだよねえ。艤装はどんなのだった？」

「そうですね……最新鋭って感じがします」

「ほう！」

「ええと、なんだったかしら。カードをスロットにセットすると自動的に組み上がって艦載機が発進するんだとか」

「なにそれ!?!」

思わず、といった風に椅子をガタツと鳴らして身を乗り出す彼女に思わずたじろぐ。目がキラキラしている、前職の血が騒ぐのだろう。

「うわー、バラしてみたい。それがダメならせめて触らせてもらえないかなあ」

「夕張さんなら大丈夫じゃないですか？」

「そうは言ってももう妖精さんの声は聞こえないからねえ。壊しちゃったら国際問題よねー」

あはは、と笑いながら頭をかく元艦娘、現カウンセラーの夕張さんと艦娘として活躍できる期間は、そこまで長くはない。艦娘として艤装と接続すると外見上歳をとらなくはなるが、それでもある一定期間をすぎると急に艤装との同調率が落ちるのだ。ある者は教職へと転向

し、ある者は軍上層部へ食い込み。そしてこの人は艦娘の精神面のケアをするため、カウンセラーへと転向した。

「夕張さん」

「うん？」

「……いつも、ありがとうございます」

『……これじゃあ、何も変わらないじゃない！』

『赤城ちゃん!!』

あの慟哭は、果たして私のものだったのか、赤城のものだったのか。当時、過同調を引き起こして錯乱していた私を身体を張って抑え、そして今日に至るまで諦めることなく根気よく面倒を見てくれたのだ。感謝してもしきれないほどの恩が、彼女にはある。

「……この世界にはさあ」

かたん、とカルテを元の場所に戻しながら。まるで一人言を呟くように、静かに夕張さんは言葉を続けた。

「同じものなんて、一つもないんだよ。人も、モノも。……だから、壊れたからって捨てたくないの、私」

「……」

「……偽善かな？」

私を見返す彼女は私を見ているようでいて、それでいてどこか遠くを見ているかのようだった。

彼女は、この、最前線を支える呉鎮守府における古参だ。なにを見て、なにを思っているのか。それをまだまだ新参者である私が推し測ることなど、できようはずもなかった。それでも。

「……偽善だとしても。それで救われたのが、私です」

私がこの人に感謝をしていることは、間違いなかった。

「……ありがとう」

彼女はそうぽつりと呟くと、ようやくいつものような人懐っこい笑みを浮かべるのだった。

※

艦隊が帰投したらしい、という情報を得て彼女の部屋へと向かった。紙の独日辞書があれば欲しいんだが、という彼女に合いそうなも

のを一つ選んで胸に抱えながらドアの前に立つ。

そういえば夜戦上がりで寝ているかもしれない、とふと思ひ至り、ドアを叩く直前で勢いを緩める。こつん、と静かな音が響いて暫くして。

『——開いている。入ってくれて構わない』

ドアの向こうからくぐもった声が聞こえ、そうつとドアを開けて中を覗き込んだ。すると途端にふわりのいい香りが漂ってきた。

「……寝ないんですか？」

「これを飲んだら寝るさ」

そう言つて手元のカップを軽く持ち上げて見せる。

「……コーヒー飲んで、寝られます？」

「問題ない。むしろ飲まないと調子がでない」

出撃中はどうしても飲めないからな、と言いながらグラーフさんは備え付けの丸い小さなテーブルにコーヒーカップを置くと、ズボンのポケットから懐中時計を取り出して開き、時間を確認した。

空母寮は基本的に和室なのだけれど、ドイツからの賓客ということもあり、彼女には使つてない一室を簡単に改装し、彼女に馴染みがある部屋へと模様替えを済ませたものを割り当てた。改装の過程で小さな簡易キッチンも備え付けられたのだけれど、どうやら彼女はそれを思つた以上に気に入つたようだった。

ドイツからもつてきた自前の器具で色々とコーヒーについて試行錯誤しているようで、キッチンにはそういった器具がずらりと並んでいた。

「日本の水道水はいいな。元々コーヒーは軟水で淹れていたんだが、なかなかどうして悪くない」

「はあ」

「朝に一杯、ドリップコーヒーの香りを嗅がないと朝が始まった気がしないんだ、例えこれから寝るとしても」

ポケットに時計を戻しながらいつになく饒舌になっている彼女に目をぱちくりさせていると、ふと彼女が問いかけた。

「……飲むか？」

「ええと。……お砂糖とミルクが、あれば」

恐る恐る返してみると、ふ、と彼女が微かに表情を緩めて頷いた。よかった、なにかコーヒーに対して並々ならぬこだわりがあるみたいだし、そんなものは邪道だと言われるかと内心ちよつとびくびくした。

そこにかけて待っていてくれ、という彼女にならない、テーブルとセットで置かれていた椅子のうちの一つに腰かける。

「あ、あと辞書お持ちしました」

「ああ、助かる。書物は紙の方が馴染みがあつてな」

「わかります。私、辞書のこの薄いページの手触りが好きなんですよねえ」

「……そうか」

手際よく準備をしながら静かに相槌を打つ彼女をちらりと見て、目の前に置かれているコーヒーカップを見る。そこから漂うよい香りが鼻腔をくすぐった。

香りは、好きなのだけけれど。どうしてあんなにいい匂いがするのには味はあんななのだろうか。コーヒー好きの彼女に面と向かって言うことは憚られたが、多分一生ブラックでは飲めないだろうな、と思いつつ彼女に声をかけた。

「あの、グラーフさん」

「なんだ？」

「……冷めちゃいますよ？」

「ああ、構わない」

ちようど私の分を淹れ終わった彼女がこちらへやってきて静かに私の前にコーヒーソーサーを置く。砂糖はどこだったかな、とまたキッチンの方に戻り、がさごそとなにやら探しながら。

「……熱いのは、苦手なんだ」

そう、ぼそりと呟いた。

「……」

「今、らしくないと思っただろう」

こちらを振り返りながら、少し拗ねたようにグラーフさんが続け

た。その表情を見て、ああ、なんだこの人にも年相応の感情があるのだな、などと聞かれたら余計に拗ねてしまいそうな思いが頭をよぎった。

とても綺麗な人だと思う。艦娘の中にはハーフであったり、それこそ外人のように美しい金髪をなびかせて走り回っている娘もいたりするけれど。それでも、早朝の薄明かりに彩られた彼女の姿は、まるで絵画のワンシーンのように様になるほど。怖いくらいに、綺麗なひと。初めて会ったときから、ずっとそう思っていた。綺麗であるがゆえ、どこか感情が抜け落ちたかのように整った顔立ちの人であると。

「ふ、ふふ」

「……アカギ」

「ごめんなさい、馬鹿にしているわけではないんですけど」

だから初めて彼女の人間らしいところが見られて嬉しくて溢した笑顔だったのだけれど、どうやら彼女には誤解されてしまったようだった。

「ふふ、じゃあ私もひとつグラーフさんにお教えしますね」

「？」

「私、コーヒーマイルクたっぷりじゃないと飲めないんです」

「……ほう」

「角砂糖は、四つ入れないとダメです」

「それは……」

「ふふ、子供っぽいでしょう？ 駆逐艦の娘には内緒にしといてくださいね」

かつこいい赤城さんのイメージが台無しになってしまいますから、と口元の人差し指をあててそう続ければ、ようやく彼女は少し表情を崩してくれた。

※

ふんふんと機嫌よく鼻歌を歌いながら軽巡洋艦用の宿舎の廊下を歩いていると、部屋からちようど出てきた神通に声をかけられる。

「姉さん」

「おはよ、神通。これから演習だっけ？」

「はい。……随分ご機嫌ですね」

「まーね」

ドイツからの艦娘二隻を受け入れてからというもの、夜戦に駆り出される事が多くなった。機嫌もよくなるというものだ。

「いやー、いいね、空母がいても気兼ねなく夜戦ができるのはさ」

「少々変わった方ですよ。……私は、まだあの人のこと、よくわかりませんが」

「あつはは、あたしも」

わしやわしやと神通の頭を撫でてやると、どこか嬉しそうに神通が表情を崩す。小さい頃からしようもないあたしを姉さん姉さんと慕ってくれてなんとも可愛らしい妹なのだ。

「……隙が、ないんだよねえ」

「え？」

ぼそり、とそう溢すと神通が小首を傾げた。

「んー、スキンシップも兼ねてなんかスツてやろうかと思っただけど」

「……姉さん」

「いいじゃん。駆逐にやると結構喜ぶんだよ？」

「あの方は空母で、上司に当たります」

「神通はかつたいなあ」

「姉さんが柔軟すぎるんです」

くあ、とあくびを噛み殺しながらぼんぼんと神通の頭を叩いてやる。

「まあ、そんな隙が一切ないからできないんだけどさ」

「隙があってもやらないでください、もう」

「んー……ドイツ人って皆あんな警戒心強いのかなー。でも戦艦の方の方はワンチャンいけそうなんだけど」

「姉さん!!」

「じょーだんだってば」

ひらり、と手を振って部屋へと戻ろうとすると、後ろから神通の声が飛んで来た。

「姉さん！」

「なーにー、あたし、眠いんだけ」

「今日は布団を干してふかふかにしてあるので、ちゃんとベッドで寝てくださいいねー！」

「……あーい」

部屋に入り、着替えるのも面倒くさくてマフラーだけをそのへんに放り投げながらベッドへと倒れ込む。夜戦が好きとはいえ、こうも立て続けだと疲労は蓄積していくわけで。

仄かに暖かい、ふかふかの布団へともぞりもぞりと潜り込む。太陽の、いい匂いがした。

「……できすぎた妹だよねえ、あたしにはさあ」

そう一人ごちながら心地よい暖かさに包まれ、そのまま深い眠りへと落ちていく。

数時間後、着替えもせず布団に潜り込んだことで説教を受けることになるのだけれど、それはまた別の話である。

※

山のように積み重なった資料のうちの一つのページをめくりながら、グラーフさんが静かに語り出す。

「我々の祖先である古代ゲルマン民族の世界観は、日本に通じるところが多い」

艦娘システムに関しては日本の技術が一步他国より進んでいる。グラーフさんがここに派遣されたのも、そういった技術に関する情報交換を求めてだった。だからなのか、彼女はいわゆる普通の艦娘よりも艦娘を艦娘たらしめるシステム、思想観についてかなり詳しくかつた。

「例えば、日本のツクモガミという考え方。これはアニミズムに通ずる」

「アニミズム？」

「ああ。精霊信仰、ともいわれるな。あらゆる事物には精霊が宿り、あらゆる現象はそれらの意思や働きとする考え方だ」

難しい日本語もスラスラと使いこなす。所々馴染みのない単語、苦

手な単語は多少発音にぎこちなさも感じるものの、特に会話をしている問題になることもない。

「しかしながら我々は歴史上、キリスト教への改宗を経てこの考え方を捨てている。それによって近代化、工業化が進み、今の我々の文明があるとも言えなくもないが」

「ああ、なるほど。だから艷装も日本に比べると機械つぽさが強いんですね」

「かもな。……だがしかし、今我々がこの艷装システムに組み込んでいるものはまさにアニメズムをベースにした呪術だ、皮肉にもな」

そう語りながら資料を捲ってはこの部分はなんと書いてあるのか、と問いかける。会話はまったく問題ない彼女ではあったが、漢字の読み書きに関してはまだまだらしく、こうして時間が合うときはよく付き合っていた。

「我々は、忘れてしまった自身の根幹たる精神を形作っていた祖先崇拜、自然信仰に立ち返るべきなのかもしれないな」

「……それで今でもそういった思想が残っている日本の霊観についての資料を読んでいるんですか？」

「ああ」

こういう資料は本国では手に入らないからな、と呟きながら指先で文字を追っていく。そして、ところどころ止まっては手帳へと何かを記載していく。

「……ドイツの艦娘の方って、皆そんなに艷装の仕組みについて詳しいんですか？」

艷装がどういった仕組みなのか、実のところ自身はあまり理解していない。理解していなくとも、全く問題なく使いこなせるからだ。それが私達を艦娘足らしめる艷装システム。だから、その仕組みについて詳しい彼女を見て少しの恥ずかしさを覚えたのと、これは国民性もあるのかしら、という疑問も感じたので純粹に質問を試してみたのだ。

私の質問に対し、ちらりとこちらに視線を寄越した彼女は、また本に視線を落としながら質問に答えた。

「……グラーフ・ツェペリンは、史実では未成艦だな。今でこそどうに

か形になってはいるが、初期は不具合が多かった。気づけば自然と知識も身につけていたよ」

そう、なんでもないことのように続ける彼女だけでも。一体その裏にどれほどの苦労があったのだろう。だって、戦場での不具合は、それこそ死を意味するはずなのに。

「ソーリユーに聞いたんだが。こっちの艦娘はツクモガミと意識が混ざることがある、だとか」

「ええ。私達は、そうですね。簡単に言えば神降ろしをしている巫女のようなものですから」

「ふむ」

「特に蒼龍は甲適性なので」

「……コウテキセイ?」

さらさらと会話の端々から単語を拾い上げ手帳に書き留めていた彼女の手が止まる。

「ええと。日本では艦娘を付喪神との相性の良さで四段階に分けて呼称しているんです」

「相性の、良さ」

「ええ。上から甲、乙、丙、丁、って」

さらさらとメモ用紙に書いてグラーフさんに見せる。慣れない単語を口に馴染ませるため、コウ、オツ……と反芻している彼女に十分な時間を与えてから話を続けた。

「甲適性は十数年に一人いるかないかレベルの逸材なんです」

「ほう?」

「乙以下の娘は同調率が上がり過ぎると精神に異常をきたしてしまうんですが、彼女達は、そうですね。端的に言えば完全に降ろせる、というか」

そう言いながらさる日の飛龍の様子を思い起こしていた。彼女は厳密には甲適性ではないけれど、戦い方はまさに甲適性そのもの。普段は無邪気で人懐っこい彼女ではあるけれど、そう。

「心の撃鉄、というんでしょうか。スイッチが入ると完全に同化する、らしいですよ」

「……らしい?」

「私は乙適性なので、あまりその感覚はわからないですよ」

負傷すればするほど、彼女、飛龍の攻撃は冴え渡る。ピンチになればなるほど、獰猛な笑みを浮かべて相手を食い破ってやると言わんばかりの攻めた攻撃をする。そう、まるで史実におけるミッドウエー海戦での飛龍の反撃のように。

「ただ、悪い面もありまして」

「悪い面?」

「ええ。私達、乙適性もそうなんですけど。艦艇の付喪神の負の感情の影響も受けてしまってます」

「すると、どうなるんだ?」

「……暴走を起こして、下手をすると大事故に繋がってしまいますね」

『……これじゃあ、何も変わらないじゃない!』

かたん、と鉛筆を机に置いて黙り込む。艦艇の付喪神の想い。後悔、しがらみ、悲しみ、苦悩。重いのだ、彼女らに宿っている積年の想いは。

「……我々はあまりそういったことを経験したことがないんだ」

「そうなんですか?」

「ああ。これは単なる仮説なんだが」

とん、とん、とゆるやかにペンのキャップ部分で机を叩きながらグラーフさんが続ける。

「日本の天皇の祖先はアマテラスオオミカミと言われているだろう。ウジガミ、という考え方にもあるように、祖先を神として崇めている日本人と神々の間には連綿とした繋がりがあある」

「……でも、私無宗教ですよ? 日常生活であまり神様とか意識したことはないです」

「でもツクモガミの存在を自然に受け入れているだろう? そういった無意識下の根本的な部分で、日本人は神々と繋がっている」

考えたこともなかった。私もそうだけど、私の周りの人達も宗教観が希薄だ。新年には初詣をし、何か困ったら神頼みと神社に足を運ぶ。けれども熱心な神道、仏教徒というわけではない。ああ、でも大

変なときに神様に頼ろうとするのは、なるほど、確かに身近に神様の存在を感じているといえなくもない。

「一方、キリスト教では神はアダムを土から作ったとしている。神と我々は完全に別たれてしまった。だからこそ自然に対しても帰るべき母体ではなく、利用し、支配するべきものと捉えるようになった」
「……ええと、つまり？」

「そうだな。我々にとって自然、精霊はただの道具、という認識が根底にあるのかもしれない。だから我々は日本人のように神々と一体化することはない、というあくまで仮説だが」

くるり、とペンを回してまたさらさらと何かを書き始める彼女を見ながら、彼女達ドイツ艦の艤装について思い起こす。日本の装備に比べ、どこか荘厳で重厚な雰囲気のある艤装だと思った。最初はそのデザインから受ける印象なのだと思っていたのだけれど、彼女の話聞いているうちにああ、と一つ思い至ることがあった。

——冷たいのだ、どこまでも。ひやりとした冷気を纏い、ただただそこに重々しく鎮座する。精霊は、道具。そう表す彼女の言うとおり、彼女達ドイツ艦娘と恐らくドイツ艦に宿っているとされる精霊の関係性はどちらかというビジネスライクなのかもしれない。

『——同じように見えるけど、全部違うんだよ。モノだつてね』

夕張さんはことモノ、艤装について親しい友人について語るかのようには話す人だった。艤装技師の人達も、今日は調子がいいなあ、お前！ と艤装に話しかけている姿をよく見かける。

モノをモノとして捉えるドイツ人。モノを人のように扱う日本人。なるほど、艤装から受ける印象の違いはこういったところからも来るのかもしれない。

「……しかし、なんだな。随分とリスクが大きいシステムに依存しているんだな」

「ええ、そうですね。だから私達は心のあり方に重きを置いているんです」

ぱたん、と資料を閉じて軽く伸びをしながらグラーフさんがぼやく。どうやら今日のお仕事はここまでらしい。だからここからは軽

い雑談、という気持ちで話を続けた。

「自身の心をコントロールする術^{すべ}。そして、自身の意識をここに繋ぎ止めるための、人との結びつき」

「……人間関係もか？」

「ええ、大事ですよ。こここの提督はよく縁って表現するんですけれど」

「……エン？」

「いまいちその言葉に馴染みがなかったのか、僅かに首を傾げた彼女に分かりやすいように説明をする。」

「ええ、人と人の、繋がり。運命の赤い糸、とかご存知ですか？」

「……いや？」

「運命のお相手とは小指同士、赤い糸で繋がっているそうですよ」

小指をちよこんと立たせてみせると、グラーフさんは怪訝そうな顔でそれを見つめた。

「何も見えないが」

「もう、例えですよ、例え。それに見えない方がロマンチックじゃないですか？」

「……よくわからないな」

そういった話はあまり興味がないのか、あるいは苦手なのか、少し申し訳なさそうに首をかきながら言葉を濁す彼女に笑いかけながら言葉を繋げた。

「まあ、これはあくまで一例で、私達は人との繋がりをよく糸に例えるんです」

「……ふーむ、興味深いな」

「強い繋がり、そして多くの繋がりには編まれた糸のように頑丈になり、人の支えとなるって。うちの提督の口癖なんです」

「ほう」

「ふふ、結構ロマンチックな表現をしますよね」

お前達はただの戦争の道具だ、と豪語する呉の提督。自身が艦娘に積極的に関わることはないが、こと艦娘の編成、転籍といった事柄において艦娘同士の繋がりを重視していることは見てとれた。

例えば、飛龍と蒼龍。彼女達がよく一緒に組まされているのは決し

て二航戦同士で組ませやすいという理由だけではない。お互いにお互いが、精神的ストッパーとして相手をここに留めるのが上手だからだ。

時々、私も怖くなる。自分が自分でなくなるかのような感覚。それは、戦いの最中。日常から逸脱した異常な環境での、異常な思考のなかでゆっくりと鎌首をもたげる、重々しく、どろりとした暗い感情。

『——ヒノ……カタマリトナツテ……シズンデシマエ……!』

一度だけ。あれは、確か全滅寸前まで追い込まれた戦いの最中だっただろうか。赤城とは異なる、なにかの声を。確かに私の内側から捉えたのだ。

——やめよう。頭を振って思考を追い払う。不確かなことをぐるぐると考えても不安が増すだけだ。そして不安が大きくなればなるほど身動きがとれなくなるということもよく知っている私は、そこで思考をシャツトダウンした。

「あ」

「うん?」

「大変、切れちゃってますよ」

ふと彼女の方を見やると、腕のところに赤い線が走っていて慌てて自身の懐のポケットを探る。

私の指摘にひよい、と腕を動かしてああ、と一拍おいてから、なんでもないことのように彼女が続けた。

「気づかなかったな」

「ええと、絆創膏……」

「これくらい問題ない」

「ダメですよ、もう。痕になっちゃいますよ」

駆逐艦の娘達に特に顕著なのだけれども、どうにも艦娘というものは自身の傷に対して頓着しない傾向がある。大破しても入渠や高速修復剤であつという間に治っていく様を見ているからだろう。だけれども、治るとはいつても少々の傷痕が残ってしまうことはある。それをどこか誇らしげにしているところもあるのだけれど、やっぱり女の子なのだから、といつしか彼女達のために絆創膏を持ち歩くように

なった。さすがに普段の喧嘩で入渠の許可は降りないし。とにかく血の気が多く、生傷が絶えないのが駆逐艦娘なのだ。

「せっかくの、綺麗なお肌なんですから。ね？」

絆創膏を貼るとき、僅かにぴくりと彼女が身をすくめたのを感じた。そういえば、グラーフさんってあまり人とべたべたくっついているところを見たことがないし。少々お節介だったかな、と若干思いながらも笑いかける。

文化の違い、というものは思わぬところで齟齬を生む。でも、多分笑顔は世界共通で人を安心させる効果があると思うのだ。気分を害したいわけではないですよ、という意味も込めて、でも彼女に不快な気持ちを与えないよう、そっと身を引きながらにこにこしているのと、彼女は一瞬困ったような顔をしながら。

「……Danke」

ぼそり、と。そう呟いた。

※

「そっちはどう？」

そう母国語で問いかけながら彼女、ビスマルクは缶コーヒーを投げて寄越した。

「特に問題はない。……ん」

「アイスコーヒーだってば」

「そうか」

缶の表記をしげしげと眺めていると、ビスマルクが呆れるように言葉を続けた。そうはいつでもこれは癖のようなものだから仕方がない。喋ることはある程度はこなせてはいるが、読み書きとなるとまた別だ。一応温かい、冷たいといった必要最低限の言葉は覚えたが。

うー、さむ、と言いながら同じ銘柄のホットコーヒーをあおるビスマルクを尻目にプルタブを引き上げて一口、口をつける。

「……あまい」

「そう？　こんなものじゃない？」

「これはもうコーヒー風味の何かだろう」

缶コーヒーに何求めているのよ、とぼやきながらフェンス越しに空を

見上げる彼女と同様に、何の気なしに空を見上げた。空には厚い雲がかかり、薄灰色の空は冬の到来を象徴するかのようだった。寒くなってきたのもあつてか、この呉鎮守府の屋上には私達以外の誰の姿も見られなかった。

「……しかし、グラーフの艦装構造はもう面影すらないな」

「ああ、噂のアカギ？ そうなの？」

戦艦と空母は宿舎が異なる。この呉鎮守府の一員として組み込まれた私達は艦装構造の解析、演習、そして出撃と他の日本の艦娘と変わらぬ生活を送っているため、中々会う時間が作れない。

日本語でコミュニケーションをとるのに問題はない、それでもやはり母国語が通じる者同士でいるということは少なからず私を饒舌にさせた。

「ああ。どちらかと言えば、そうだな。リユージョーなどの艦装のが近いかもしれない」

「ふうん」

「アカギは……初期型だからだろうか。いやに古臭い艦装だと思ったよ、正直」

グラーフは赤城を参考として作られた。史実では完成し得なかったグラーフの試作型が、私だ。大分調整も進んできて調子もいいが、それでも問題点や改善点は散見される。

『——本家を見てこい』

別に、元々そんなに興味はなかった。ただ、それが任務であるならこなすだけ。ただ、思い描いていたものと異なつて少し驚いただけ。

「……それ、言わない方がいいわよ」

「さすがにそこまで空気は読めなくはないぞ」

甘ったるい液体を一息に流し込んで、ズボンのポケットから懐中時計を取り出す。はあ、と息をつくとき、それはほんのりと白く色づいた。

「大丈夫？」

「ああ」

パチリ、とそれを閉じながら言葉を続ける。

「照準すらついていない弓矢で発艦するなんて、正気の沙汰とは思え

ないな」

「でもこっちの正規空母は大体そのスタイルなんでしょう？」

「まあな」

極東の島国。そこに住む人々も、気候も、文化も。なにもかもがドイツと異なる。わからないことだらけだ。駆逐艦の娘との会話中にじっと目を見つめていたら、あわあわと視線をそらされ——かと思ったら意を決したかのようにきり、と見つめ返され、数秒でまたもとの状態に戻る。最近は何となくそれが面白くてじっと観察をしているのだが、日本人はシャイだからずっと目を見つめていられないですよ、とは後でビスマルクに聞いた。

「理解に苦しむ。……が」

「が？」

タアン、と高らかに響く音。残響の中、そよ風に揺られる美しい黒髪、まつすぐに伸ばされた背筋。その背丈は、私よりも一回りも小さいというのに。放たれた弓矢はどこまでも力強く、まつすぐに飛んでいく。その、後ろ姿を。

「……美しいとは、思ってたよ」

どうしようもなく綺麗であると。そう感じてしまった自身の心でさえ。よく、わからなかった。

※

せつかくの休日だと言うのに、早く目が覚めてしまった。辺りは薄暗く、時計を確認すればまだほとんどの人が眠りこけている時間帯だった。

目が覚めたというのにまた寝ようと頑張るのも少々馬鹿馬鹿しい、せつかくだから外を散歩してみようか、と外套を着こんで懐中時計をポケットに突っ込みながら宿舎を出た。

空がようやくと少し白み始めたところだろうか。はあ、と息をつけば緩やかにそれが色づき、首元のマフラーをしつかりと巻き直した。

ああ、そういえば。確かこの近くに大きな公園があるんだっただか。元々静かな場所でゆったりした時間を過ごすのを好んでいた私は、ここに来てからばたばたと忙しく、まだそういったお気に入りの場所を

探していなかったことを思い出し、せつかくだからとそちらへと足を向けた。

手入れが行き届いた、綺麗な公園だった。芝生はきちんと整えられ、噴水からは静かに清らかな水が流れ落ちていた。日中ここで読書をするのもいいかもしれない、と思いつつ、せつかくここへ来たのだからとある場所へと向かう。そして、目的の場所を遠目で見つけて——思わず身を隠してしまった。それは、まさかこんな早朝に人と出くわすことなどあるまいとたかをくくっていたための反射反応のようなものだったが、そのお陰で相手にこちらの存在がバレることはなかった。そおっと木の影からその人物の様子を伺って——予想外の人物が、予想外の状態でそこにいたため、思わずかたまってしまった。

この大きな公園の、少し外れ。そこには大きな石碑があり、戦没者である艦娘の名前が刻まれている。そしてその前に立って、石碑を指先でなぞりながら。——赤城が泣いていたのだ。

「——」
ここからは少し距離があるため、なにを言っているのかはわからなかった。それでも、何かを語りかけるようなその仕草に、誰かを偲んでいることは間違いなかった。

一通り語り終えると、ごし、と自身の腕で涙を拭いたり、そしてぺちん、と両手で両頬を叩いてその場を後にする。こちらに振り向いた彼女の目は少し赤かったが、それでも顔つきはいつもの、極めて凛々しい、駆逐艦娘からかっこいい赤城さん、と呼ばれるのにふさわしい表情だった。こちらに気づくことなく横を通りすぎていった彼女の後ろ姿が見えなくなるまで見送って、自身も石碑の前に立つ。

ずらりと並ぶ文字の列。漢字はまだあまり読めないが、ここに並ぶこの文字が何を意味するのかは知っていた。

『——艦娘は、艦娘として死ぬんです』

それは、ドイツと日本の艦娘に対する価値観の違いについて赤城と話し合っているときだった。

『死してなお、石碑に刻まれる名前は艦名です。この日本において、艦

娘は一個人として認識されたいんです。……だから』

「……まさか、毎日来てるのか」

綺麗に掃除された石碑の周囲と、そっと添えられている真新しい花を見てぼそりと呟く。

『せめて私は、その娘達のことを一人の人として。……覚えておきたいなど、思うんです』

見なければよかったと思う。普段穏やかに皆に笑いかけ、常に頼りにされている彼女が早朝、ひとりで泣いているあの姿を。きつと、あれは誰にも見られたくない彼女の一面なのだろう。だからきつと皆が寝静まっているこの時間にひとりここで佇むのだ。

見なければ、よかったと思う。艦娘にとつて死別は日常茶飯事だ。死んだからといって一々死者に心をさいていたら身が持たない。だから自身は例え仲間が死のうと、あのように心から涙を流すなどということはしなかった。だからこそ。死者を悼み、涙する彼女のことを、理解できないと思つてしまったのだから。

※

とある日の昼下がり。この時間になると鎮守府内もガヤガヤとうるさくなってくる。ここの鎮守府では艦種ごとに食堂が異なるため、各々別の方向へと行き交う人々で廊下が混雑する。

食堂に向かう途中、前方に軽巡洋艦の由良を見つけた。軍から支給されている携帯端末に視線を落としながらゆっくりと歩いている彼女のその後から、ぴよこぴよここと跳ねるように近づくと人物が一人。

「ゆらー！・ きーん！・ 今度のお休み一緒に買い物いこー!!」

「きゃっ!?!」

ホップステップジャンプ、といわんばかりの勢いで夕立が由良に飛びつき、たたらを踏みながら由良が悲鳴をあげた。

「由良さんー!」

「ちゃんと言ったっばい?」

「なんかとつてつけた感じがしたわよ!・ さんの部分!」

「そ、そんなことないっばい」

「目を見なさい、夕立ちちゃん」

むぎゅーと両手で由良が夕立の両頬を押し潰すと、声にならない悲鳴が夕立から上がった。

「由良のばかぁー!」

「さん!!」

「さーん!」

「名前にくつつけなさいって言ってるでしょ!」

ぎゃあぎゃああと廊下で騒いでいる二人の隣をそおつと通り抜けて、思わず苦笑いをした。

「仲が、いいんだな。あの二人は」

「そうですねえ。由良さんは、もう少し敬って欲しいみたいですけれど」

軽巡の方は多かれ少なかれ面倒見がいいですからね、と笑いながら食堂に向かう赤城の隣に並んで歩く。

「あ、赤城さん!」

「あら、巻雲ちゃん」

「この前はありがとうございます!」

「もう転ばないようにね」

パタパタと落ち着きなく駆けていく駆逐艦と思わしき女の子が、ペこり、と頭を下げたまた走り去る。

「赤城さん」

「はい、こんにちは、神通さん」

「この前那珂ちゃんが横須賀から間宮の羊羹をお土産にもってきてくれて」

「あら」

「よければ、空母の皆さんにも」

「いいの? ありがとうございます」

今度はすれ違った彼女から受け取ったお土産を嬉しそうに胸に抱え込む。

「グラーフさんは羊羹を食べたことはありませんか?」

「いや?」

「ふふ、じゃあ食後に一緒に食べましょう。私の大好物なんですよ」

そうして、ひとり、またひとりとすれ違っていく人達に声をかける。すれ違う艀装技師に、調整していただいてからとても調子がいいんですよ、と返しているのを見て思わず彼女に問いかけた。

「……まさか、この鎮守府にいる全員のことを覚えているのか？」

「え？ はい、それは、まあ」

そんなわけないじゃないですか、という答えを期待していた私は、まさかの返答に押し黙った。いや、ここに何人勤めていると思っっているんだ。赤城なりの冗談なのだろうかとも思ったが、きよとんとこちらを見上げる彼女の様子を見るにどうやら本気でいつているらしい。

「みんな、大事な仲間ですから」

袖振り合うも、多少の縁。そつと呟かれた単語が耳に残る。また、縁か。

「すれ違って、ほんの少し袖がふれ合っただけの関係だったとしても。前世からの縁があるそうですよ」

「……」

「だから。……私は、私に関わる人達を、大切にしたいんです」

ああ、だから。だから誰もいない墓前で人知れず涙を流すのか。自分に関わった人達を偲ぶために。

不器用な人だな、と思った。そうやって全てを抱え込んでいったら、きつと身動きがとれなくなるだろうに。それでも出合いのひとつひとつを蔑ろにできないのだ、この人は。

黙ってそのまま歩き、食堂へと足を踏み入れる。辺りに漂う匂いから、今日はカレーらしいということが伺えた。お盆に一通り載せて辺りを見回すと、ちょうど赤城が隣、いかしらとある二人組に声をかけているところだった。どうぞどうぞ、と席をすすめる二人に言われるまま、席について食べ始める。

「あー、演習つつかれたー」

「艦隊運動はまだちよつと慣れないよね」

「輪形陣とかそわそわする」

「今までの訓練、少人数でやってたもんね」

「あと駆逐艦の娘からキラキラした眼差しを受けるのも慣れない」

「わかる」

呉鎮守府の空母の中では比較的新人にあたる飛龍と蒼龍。まだまだ慣れないことも多いのか、カレーをつつきながら二人してぼやく。「でも飛龍も蒼龍も回避運動上手よね、まだ艦娘になって日が浅いの。すごいわ」

あーだこーだと喋り続ける二人の会話を聞いていた赤城が、それを受けて朗らかに褒めると途端に二人がぴたりと動きを止めた。

「……ああ」

「それは……」

「鬼教官達に鍛えられましたから……」

見事にハモらせながら、どこか遠い目をしながらしみじみと二人が呟く。

「……オニキョーカン？」

「ええー」

思わず聞き返すと、飛龍が力強く頷いてキツと目を細め、上から見下すかのような仕草で誰かの真似をする。

「——誰が弓を落としていいと言いましたか」

「……似てるー」

それを受けてふは、と思わず吹き出した蒼龍に気をよくしたのか、今度は腕を組みながらじと目で別の誰かの真似をした。

「飛行甲板は盾じゃないっつってんでしょ」

「ぽいぽい」

あはは、とお腹を押さえて笑い転げる蒼龍。そして飛龍は今度はノリノリで片目を手で隠してすごんだ。

「艦載機がなけりやなア、殴ればいいだろ」

「後でそれやろうとしたら怒られたよね、提督に」

「あの人達という感覚狂うわよね……」

「お仕置きの正座にも慣れちゃったよね……」

そしてまた遠い目をして黙り込む二人。つい最近、こんな感じの人達をなにかで見かけた気がしたのだがなんだったのだろうか、と食事を咀嚼しながら考えていると、ふとその単語が思い浮かんだ。

「……ヤクザ？」

「ぶっ！」

思わず咳き込む二人。……なにか、間違った表現をしただろうか。
「いや……カタギ、の、はず……」

「そこは自信持とうよ……」

「だって……」

「ていうかどこで仕入れたんです、そんな単語」

「ビスマルクに無理矢理押し付けられたマンガから」

「漫画読むんだ……」

「悪くはなかった」

絵から会話を類推できるし、なにより漢字にふりがながふられていて意外といい教材になった。ただビスマルクが出撃の際によりし、カチコミよ！ と叫んだら周りがぎよつとしたので、使い方には注意がいるのかもしれない。

「……しかし、よく食べるな」

「はい？ ……あー、はは」

三人前はあるのではないか、という大皿に盛られたカレーがものすごい勢いで飛龍の胃の中へとおさめられていく。その食べっぷりは見ていて気持ちがいいが、一体この体のどこにそんなに入るんだ、と思わず言葉を溢してしまった。

「まあ、なんていうか。……こいつが大食らいなもんで」

「は？」

ぼそり、と呟かれた言葉がよく聞き取れず、思わず聞き返すとうーん、と唸りながら彼女が言葉を続けた。

「まあ、食べても食べてもお腹がすいちゃう体質みたいなもんです」

「もともとよく食べる方ではあったけどね」

「そ、そう？ そうだっけ……蒼龍が少食なのよ」

「そうかなあ」

「女の子ぶってんじゃないわよ」

「まごうことなき女の子だよ!!」

ぎやあぎやあとまた姦しくなる二人を見て苦笑いをしながら、ちら

りと赤城の方を見やる。彼女は穏やかな表情でそんな二人のやりとりを眺めていた。

赤城は、そこまで喋る方ではないと思う。それでも一人一人、会う人に声をかけ、言葉を交わす。そしてそのときの表情はそう、まさにこのような、まるで穏やかな時の流れを慈しむかのような顔をするのだ。

「でもなんか食堂のおばちゃんには歓迎されてるんですよー」

「あー、なんだっけ。赤い悪魔の再来だっけ？」

たまたまだった。横目で彼女を見ていたからこそ、その僅かな変化に気づいた。ぴくり、となにかに反応して身じろぎをする彼女の様子に。

「久々に腕が鳴るわ、つて目え輝かせられちゃってさー。あれ、なんだろ」

「さあ?」

まー迷惑じゃないならいいんだけどさあ、とぼやきながら彼女がカレーを完食するのと、けたたましく食堂の引き戸をうち鳴らして龍驤が怒鳴り込んでくるのは同時だった。

「くおら飛龍!! おどれ昼は次の舞鶴航空部隊との合同演習のミーティングがあるつつたやろ!!」

「……あれ?」

「十秒で準備せえ!!」

わー! なんて蒼龍教えてくれなかったの!? え!? 私のせい!? などと言い合いをしながらガタガタと慌ただしく二人は去っていった。

「……元気だな」

「あはは……」

思わず苦笑いをこぼした赤城ではあったけれど、どこかそこにぎこちなさを感じた。確か、あの単語が二人から出てきた辺りから。なんとなくその単語の意味も気になったことだし、と食事が落ち着いた辺りで話を切り出すことにした。

※

それは、とても自然な会話の流れだった。

「——アカイアクマ、とはなんだ？」

だから、ある程度予測はできていたのだ。それでも、この話題に触れるときは、どうしても。

「あー……前の、赤城さんのことですね」

心が少し。重くなるような気がした。

「前のアカギ？」

「はい。……ふふ、色々とすごい人で。弓の代わりにしやもじで出撃しかけただとか」

「……」

「一人で食料庫を空にしただとか、夕御飯に間に合わなくなるからと一瞬で敵を殲滅しただとか」

「……それは」

「食に関する逸話に尽きない人で。その破天荒っぷりについたあだ名が赤い悪魔です」

『——赤城』を、よろしくね』

かたん、と箸を置く。どこかつかみどころがなくて、それでいて気がついたら目で追ってしまふような妙な魅力のある人だった。

候補生時代を呉で過ごしていた私は、少しでも彼女と話す機会があった。破天荒でいて、それでいて気がついたらみんなの中心にいる、強く、しなやかな彼女と。

『ちちゃんと面倒を見てあげるのよ、加賀』

『……いつも私が誰の面倒を見ていると思っっているんですか』

『あら』

彼女の相方であった、加賀さんに。

「……随分と、その。個性的な人だったんだな」

「ええ。でも、それ以上に皆に愛される素敵なお人でした」

『一航戦の誇りにかけて』

それが口癖だった彼女は、その言葉の通りどんな逆境でも笑って乗り切るような強かさ、確かな実力を兼ね備えていた。そして、彼女の隣には無口ながらも阿吽の呼吸で彼女を支える加賀さんがいて。

ああ、これが一航戦なのだと遠目で見て思ったのだ。

「私も、赤城さんみたくなれるように。……頑張らないと」

だからこそ。だからこそ、失敗してしまった弱い私は。一航戦という名を汚してしまった私は、もっと強くならねばならないのだ。そうでなければ申し訳ない。ここに居る皆に、そして。今は遠くの地にいる彼女に。

「……よくわからないが。前のアカギと今のアカギは別人だろう」

「……え？」

深く自身の思考の沼へと落ちていた私は、彼女の予想外の言葉に反応が僅かに遅れてしまった。

湯飲みに落としていた視線を上げれば、彼女はこちらをじっと見つめていた。

グラーフさんは、人と話しているときその人の目をじっと見つめる。最初は怒っているのかしら、と少し怖く思ってもみたけれど、どうやらそれは彼女なりに真摯に話を聞いていることを表しているらしい、ということに最近気づいた。

「そうだな。私が知っているアカギは、コーヒーをブラックで飲めなくて」

「ちよ、ちよつとグラーフさん」

慌てて辺りを見回す。幸いにも喧騒に紛れ、誰も私達の会話を聞いていなかったようなのでほっと胸を撫で下ろした。

「それでいてちよつと見栄っ張りです」

「う」

「あとは……」

ぎ、と深く椅子にかけながら食堂の粉末を混ぜて作られたタイプの大きくて美味しくもない冷たいお茶を片手で、まるでウイスキーを飲むかのような仕草で傾けながら。

「とても丁寧に生きる人だと思う」

「……え？」

まるで予想だにできなかった言葉を溢した。その、少し灰色がかかった董色の瞳でじっと見透かされ、思わず動揺する。

「貴方は自身と相対する人や物事に対してとても真摯だ。どれをとつても蔑ろにはしない」

「……」

「前のアカギがどんなにすごかったのかは知らないが。貴方は今のまま、十分に尊敬されるに値する”アカギ”だと思う。……私にはできない生き方だ」

少し、生きづらそうだが、とぼやきながらグラーフさんはことりと静かに湯飲みをテーブルに置いた。

『――さすが、”赤城”さん！』

そうでしょう、だって私のはあの赤城なのだもの。誰からも尊敬され、艦隊の中心となってしかるべき、誇り高い一航戦の。あの人と同じ軍艦の。

強くあらねばならない、皆を不安にさせないためにも。

『――私はいいい、から。赤城、さんを……！』

涙を他人に見せてはならない。天下の一航戦がそんな泣き虫であると知られては皆を不安にさせる。だから、私を守って死んでいったあの娘達を想って泣くのは、必ず誰もいない早朝の、みんなの名前が刻まれたあの墓標の前でだけと決めていた。

『……ごめん、なさい』

私はいつだつて自分のことではいいいいいい。あんなに頼りになる彼女が、あんなに弱っていたことに。あの日、佐世保に転籍になったのだと一筋の涙を流しながら告げられるまで気づけなかった。

強くならなければならぬ。愚かな自分を戒めるため、みんなの理想の赤城であるため。だから、だから私は。

「……グラーフさんって」

ようやく言葉を形作ると、喉がひりついて少々声がかすれてしまった。それを知ってか知らずか、視線をはずしてぼんやりとあさつての方を眺めていた彼女がこちらを見返す。

「ん？」

「結構、はつきり言いますよね」

「……気分を害しただろうか」

「いえ、そういうわけではなくてですね」

喉の渴きを誤魔化すように冷めてしまったお茶を一口含んで、
ゆっくりと噛み締めるように言葉を紡ぐ。

「……ありがとうございます」

きっと先代の赤城さん知らないから。きっと、一航戦という名の
重みを知らないから。だから彼女は純粹に私を”私”として見てく
れているのだと、わかっている。

「うん？ ……うん、なんだ、よくわからないが……どういたしまして
？」

怪訝そうな顔をしながらそう答える彼女を見て。久しぶりに、心か
らの笑顔が溢れたような気がしたのだ。

後編

※

「ビスマルク、握手をしよう」

「……は？」

いつものように屋上で。故郷のヴルストがちよつと恋しいわよね、などと他愛もない話をしていて、ちようどその会話が途切れたときだった。

あからさまに胡散臭い顔をしながらも手を差し出すこいつは、根がいいやつなのだと思う。だからこそ、私でも比較的うまく付き合っけていけているのだろう。

「……あいだだだだ!!」

「痛いか」

「痛いわよ!!」

ぶん、と手を振り払ってビスマルクが吠える。

「あなた馬鹿力なんだから加減しなさいよ！」

「そんなにか？」

「戦艦には劣っても曲がりなりにもあなたは正規空母なのよ」

手を振りながらあいたあくどぼやく彼女を尻目に、自身の手のひらを眺めた。

「……そうか」

「なあに、急に。どうしたの」

『——痛い!!』

怯えるような目。気味悪がるようなその表情。全身から滲み出る、拒絶の態度。

「……別に」

きゅ、と手を握りしめながらそう呟くと、ビスマルクがフェンスに寄りかかって腕を組みながら話しかけてきた。

「ふうん？ 珍しいこともあるものね……あなた、人に触れるのも、触れられるのも苦手でしょう」

そうだ、その通りだ。だから常に人と一定距離を保てるよう、気を

配ってきたはずだ。川内からはたまになにやらこちらを探るかのよ
うな気配を感じることもある。それでも隙を見せないということ
を悟るとなにやら楽しそうにニヤニヤしているから、あれでいてあの女
は諦めが悪いようだ。なにを仕掛けようとしているのかは知らない
が。

そうなのだ、川内がつけている隙がないくらい、かといってあからさ
まに人を避けているということは悟られない程度には気を使い、人と
ちようどいい距離を保ってきた、そのはずだった。

『——痕になっちゃいますよ』

人との距離感が近い人なのだと思う。ただ、べたべたとしてくると
いうよりかは、ごくごく自然に時たま触れてくるくらいのスキンシッ
プ。こちらが身を強ばらせると、そつと距離をとつて笑いかけてく
る、そういつた距離感。

人と触れあうのは苦手だ。どう返せばいいか、わからない。だから
困る、近づかないで欲しい。そう、思っているはずなのに。

「……まあな」

気づけば彼女に接触を許して。そして、彼女の手が離れていくその
瞬間。少し、寂しいなどと思ってしまうのは。きっと、気の迷いな
のに、違いない。

※

「——赤城さんですか？」

発艦を終えた飛龍が、こちらを振り返る。

「ああ。日本の艦娘にとつて、イツコーセンとはなんなのだろうか
思つてな」

ちようど個人練習へと繰り出した彼女に、見学させてもらつてもい
いだろうかと着いてきてその様子を見させてもらつていたのだが、
せつかくだからと艦載機が目標に到達するまでの間、気になることを
質問してみたのだ。

「うーん、私はここに来て日が浅いからなあ。まあ、二航戦なりの対抗
心みたいなものは若干あるみたいですけど」

飛龍はたまに自分のことをどこか他人事のように話す。最初は聞

き取りの問題かと思ったが、何度かそう感じたことがあるのでこちらの言語能力の問題ではないような気がしてきた。

今日は風が気持ちいいですねー、とどこかのほほんとしながら彼女が続けた。

「二航戦とか二航戦とか、正直よくわからないけど。赤城さんは好きですよ、一緒にいて落ち着きますよね」

「……そうだな」

「鳳翔さんにちよつと似てるんですよー」

「ホーシヨー？」

「はい、私達の弓の先生だったんですけれど」

二人とも射が綺麗なんですよ、と言いながら飛龍が目を細める。それにつられて目標物へと視線を移した刹那。海面を切り裂くように。水切り石が水面を跳ねるかのごとく、海面すれすれを飛んでいく艦攻が目標物を捉えた。

艦載機の動きには、少なからず個性が出る。例えば赤城の艦載機達は上空を丁寧、それでいて力強く伸びやかに飛んでいく。それに対して飛龍は、その無邪気な外見に相反して妙に攻撃的というか、相手の喉元に食らいつくかのような獰猛さを兼ね備えた飛ばし方をするものだ、と思った。

「……あんなに低く飛ばして、海面衝突しないのか」

「あはは、しませんって。うちの子は」

「……でも、危ないだろう？」

「うーん？ まあ危ないけど」

でも当たりますよ？ とあっけらかんと言われて思わず黙り込んでしまった。

こうやって彼女ら、日本の正規空母の訓練を見せてもらおうようになって、ますますわからなくなっていく。弓矢という一世代も二世代も前の古臭い道具を用い、その癖確かな技の冴えで得体の知れない強さを誇る彼女達が。技術的にはドイツの艦装の方が遥かに進んでいるように感じるのに、それに勝るとも劣らぬ強さが、どこからくるのか。それがどうしてもわからなかった。

「……誇りとは、なんなんだ」

だからそれは、思わず溢してしまった言葉だった。

『一航戦は私達の誇りですから』

日本人がよく使う誇りという概念。誇りがある、と自身を律し、誇りだ、とその姿を重んじる風潮。

『——だから、今度は絶対に守ります』

そう静かに私の問いかけに答えた駆逐艦の彼女。どう見たって、ただの少女だ。だというのに静かにそう言い放った彼女の瞳に宿る、確かな力強さ。

わからなかった、なにもかも。

「——誇りつてのは、人々の願いを背負うことなんだと思うよ」

不意に。ざあ、と風が吹いた。帽子が煽られそうになるのを押さえながら、彼女の方を振り返る。

「こうあれっていうね。だから私達はその願いを背負い、立ってられるよう心を鍛える。そしてその術すべが私達にとっては弓”道”なんだ」

妙な感じがした。そこにいる彼女は彼女であって、そうではないかのような。確かにそこにいるのは飛龍のはずなのに、穏やかにそう語る彼女はまるで別人のように思えた。

「的中てるのなんて大した意味はない。その的中てるまでの過程が大事なのよ」

「……過程」

「そ。そしてそこに正解なんかないからさ。ずっと悩みながら、それでも自問自答し続けるわけ」

暫く押し黙っていると、ふい、と空を見上げた飛龍は淀みなく戻ってきた艦載機達を飛行甲板で受け、流れるような動作で矢を矢筒に戻していった。カランカラン、と妙に涼しげな音が辺りに響く。

「……答えのわからないものに向き合ったって、時間の無駄だろう」
くるくると手元の矢を器用に弄んでいた飛龍にようやくくそう言う
と、ちらり、とこちらに視線を寄越して彼女が答えた。

「向き合うことが、大事なのよ」

「……」

「心つてのは臆病だから。そうやって向き合う癖をつけていけないと
ついつい逃げちゃうからさ」

そう言ってこちらをじつと見つめる彼女の瞳は、どこまでも穏やか
で。それでいて、まるで全てを見透かしているかのような、そういつ
た居心地の悪さがあった。

「……理解、できない」

その視線から逃れるように、そう吐き捨てる。

「そ？ ……いつかわかるといいね、私みたいに」

そうぽつりと呟いて。もう戻りましょうか、と静かに続けながら、
呉の港へと緩やかに進んでいった。

※

『——素晴らしい』

……うるさいな。

『君のその体質はかけがえのないものだ。是非とも人類救済のための
礎となっていたきたい』

体のいい、おとなしいモルモットが欲しかっただけだろう。

好きにすればいい。どうせ、なにも感じはしない。これが人類のた
めとなるのならば、甘んじて受け入れよう、私にとってこれはどうで
もいいことなのだから。

『——痕になっちゃいますよ』

どうでも、いいんだ。

『せっかくの、綺麗なお肌なんですから。ね？』

……どう、でも。

※

鎮守府内が途端に慌ただしくなる。呉鎮守府では単なる日常の一
部。どこの鎮守府よりも真っ先に危険な最前線へと送られ、人類の生
活圏を守るべく奮闘するここの艦娘にとって、このビリビリと空気を
伝う緊張感も、そして風に運ばれる海の匂いに混ざり込むなにかが焦
げ付いたかのような異臭と、鉄の臭いは単なる日常の一場面。この、
血と、艤装の鉄の臭いが混ざり合っ形成される、死のにおいでさえ。

「……！」

いてもたってもいられずに工廠へと飛び込むと、その臭いがより一層強くなる。一瞬それに意識を持っていかれそうになって——響き渡る怒声が私の意識をここへと引き戻した。

担架はどこだ、高速修復剤の在庫は、トリアージ早くしろ、などと飛び交う怒声をくぐり抜けて、ようやく目的の人物の姿を捉えた。いつもよりさらに帽子を目深に被り、焼け焦げた服の隙間から大量の血を流しているその人を。

幸いにも轟沈はいなかったらしい、と聞いていた私はそれでもこの目で見るとまでは、とここまで駆けてきたのだけれど、彼女の姿を捉えることで一瞬安堵して——そしてその有り様にざあつと血の気が引いていくのを感じていた。

「——グラーフさん!!」

びくり、と私の大声に反応して彼女の身が揺れる。私は、そんな彼女の様子を気に留めるでもなく駆け寄った。

「奇襲にあつたって……！」

「……っ、あ」

だから、想像さえしなかった、彼女の帽子の下に隠された表情を。だって、こんなに大怪我をしていて、私は心配で心配でたまらなくて。

「止血、その前に鎮痛剤を……！」

そう言って駆け寄ると、彼女はバツと咄嗟に出血部分のひどい左腕を私から隠すようにして、私から一歩後ずさった。そのとき、ちょうど帽子の下の彼女と視線が合わさって。

「……」

その目が、なにかにひどく怯えているかのように私には映って、微かな違和感を覚えたのだった。

「……グラーフさん？」

「……、だ、いじょうぶ、だ」

「そんなわけ……！　だって、血が！」

思わず一歩踏み出すと、下を向いた彼女が、その傷口を私から隠すように右手で覆って。ぎゅつと力強く握りしめた。

「……ちよ、つとグラーフさ」

「大丈夫だ」

「そんなわけ」

「だいじょうぶ、だ」

彼女から受ける、初めての強い拒絶。どうしていいかわからず、思わず伸ばしかけていた手が空を切る。この喧騒のなかにいて、私達二人だけの空間がまるで切り取られたかのように音が遠くなった気がした。

「なにしてんの死にたいの!？」

「あ、い、や……」

「ぼーっと突っ立ってないではやく入渠施設はいつて！ 歩ける!？」

「あ、ああ」

「じゃあほらいくわよ!」

頭がうまく回らなかった。だから、なんと声をかけていいのかわからず言いあぐねていたら、救護班の女性が怒鳴りながら私達の間に入ってきて、あつという間に彼女を入渠施設へとつれていってしまった。

そして、すれ違い様。彼女の目がこちらに向けられることは、なかったのだった。

※

『ねえ、血がでてるよ!』

『……本当だ』

怪我をすれば真っ赤な液体が体からこぼれ落ちるのだということをお教わった。

『死んじゃうよ!』

そしてこの真っ赤な液体が流れて、流れて。それが足りなくなるのと、人は死ぬのだと。

『……なんで、平気なの?』

だって、わからない。

『……ああ、あの子はね』

だって、理解できない。

『あなたとは違うのよ。近づかない方がいいわ』

そうだな、その方がいい。だって。

『本当に気味が悪いわ……怪我をしても表情一つ変えないんですもの』

わからないものとは。結局どうしたってわかりあうことは、できないのだから。

※

「屋上、好きなんですか？」

探し人をようやく見つけて声をかける。手元の懐中時計に視線を落としていた彼女は、パチリとそれを閉じて静かにこちらに振り返った。

「……空がよく見えるから、な」

「そうなんですか」

そうしてゆつくりと彼女に近づく。いつでも逃げられるよう、そして彼女を怯えさせぬよう。黙ってそれを見ていた彼女は、とうとう隣に私が立つても何もいうこともなく、その場から動かずに静かに佇んでいた。

「冷えちゃいますよ」

「……ああ」

そういつて手元の紙コップを渡すと、それを受け取って彼女は黙りこんでしまった。

今日は、満月が綺麗だ。灯りのないこの屋上において、彼女の横顔がよく見えた。月明かりに照らされた彼女のその表情は、なにかを考えているようでいて、なにも思っていないかのような。相変わらず表情が読みにくい人だと思うけれど、それでも短くはない時間をこの人と過ごしてわかってきたこともある。

「お怪我の具合はいかがですか」

「問題ない。あれくらいならすぐに治ることくらい、知っているだろう」

「そうですね」

「……話はそれだけか」

これは、拒絶をしているのだと。今まで私が触れても、身を強ばらせても拒絶をされることはなかった。それに、たまに。怖々と弱々しい力で握り返してくれることだってあった。だから、あの日から彼女は私を拒絶しているのだと、ここ数日の態度で悟ったのだ。

「最近避けられてるなーって思ってた」

「……」

「だからちよっとお話できたらなって」

でも彼女は私のことを少々勘違いしている。こう見えて結構凶太いのだ、私は。拒絶をされたくらいで身を引くほどか弱い乙女などではない、そんなものは拒絶のうちに入らない。

「……別に、避けていない。これが私の距離感だ」

ほらそうやって。私を傷つけないよう、そっと距離を取る。

「そうですか。……ねえ、グラーフさん」

人のことをよくみている人だと思う。だからこそ、相手を不快にさせないようにそっと距離を取るのがうまい。それを拒絶だと悟られずに、ああ、こういう人なのだと思わせて人と一定の距離を保つのが。

だから彼女が頑なに心を閉ざして、あからさまに私に対して拒絶の意を示しているのにはきつとなにかがあると思った。そして、今までの彼女とのやり取りでわずかに覚えた違和感。その、蓄積。それを元に、かまをかけることにした。

「——それ、冷たいお茶なんですけど」

「……」

「キンキンに冷やしたやつです、ずっと持っていたら痛くなるくらいの。いつ気づくかなって、思ったんですけど」

一瞬。彼女がわずかに動揺したのを見逃さなかった。

「……手袋越しだな」

「そうですか」

「ああいう風に渡されたら、まあ。勘違いするだろう」

「そうですね、ごめんなさい。……飲まないんですか？」

上手に隠したと思う。それでも、近くでよく見ていた私にはそれが

わかった。

「体が冷えてしまうだろう」

「ごめんなさい、本当はそれあったかいんです」

「……」

「大丈夫ですよ、火傷するほどには熱くないですから」

そう言っただけで自分の手元のお茶を飲む。熱いのが苦手だという彼女に合わせ、火傷をしない程度の、かといってぬるすぎない程度に温かいそのお茶を飲み終えて、近くにあったゴミ箱へと捨てた。

本当に手袋越しでわからなかったのかもしれない。でも、それならば動揺などするはずがないのだ。だから、彼女が次の言い訳を並べる前にこちらから逃げ道を塞ぐことにした。

「ねえグラーフさん。——あなた、感覚がないんじゃないですか？
そうですね、痛みとか」

負傷した皆が痛みでうめき声を上げるなか。決して軽症ではないはずなのに、平然と立ち尽くしてた彼女。傷口をあんなに強く握りしめて痛くないわけがないのに、悲鳴すら上げなかった。そして、あの時見た彼女の表情は、決して痛みで歪んだものではなくて、そう。なにかを知られてしまうのを、怖がっているかのように思えたのだ。

「……まいったな」

私の言葉を受けて黙り込んでいた彼女は、暫くしてそう弱々しくぼつりと呟いた。目の前のベンチに紙コップを置いて懐から軍支給の携帯端末を取り出し、なにやら調べながら言葉を続けた。

「……日本語で、なんと言うかわからない。……ああ、多分これだな」
そう言っただけでグラーフさんが端末の画面をこちらへと向けた。それを覗き込みながら、その名前をゆっくりと読み上げる。

「……先天性、無痛症」

聞いたことのない病名だ。それでも、字面からどういう症状なのかは類推できた。

「私は、生まれつき温度や痛みを感じる事が、できないんだ」

そう静かに語る彼女の表情を、私はうまく読み取ることができなかった。無表情のようでもあるし、どこか寂しそうでもあるし。そし

て、何かを諦めたような顔でもある気がした。

「艦娘になってよかったことといえば、艦装を装着している間は身体の損傷具合を数値として把握できるようになったことだな。まあ、日常生活は気をつけなければならぬんだが」

『——熱いのは、苦手なんだ』

ああ、あれは、そういう。思い返せば、めっきり寒くなってきたというのにいつも飲んでいるものはぬるくなったものか、冷たいものだった。あれは、火傷しても気づかないから気をつけていたんだ。

「……この、懐中時計。よく見ているのは時間に几帳面だからじゃない。気温をチェックしていた」

「……体温調整のため？」

「ああ。まあ、体温に関して言えば身震いや汗などである程度は気づけるんだが、昔からの癖でね」

今までの事柄が、ぱちり、ぱちりとまるでジグソーパズルのピースを一つずつ埋めていくように鮮やかに繋がっていく。

ああそうか。人と距離をとるのも、常に気を張っているのも。怪我をしても気づかないから。それを、知られないようにしていたから。そういう、ことだったのか。

言葉を失っていると、その様子をじっと見つめていたグラーフさんの表情がふ、と緩んだ。

それは、笑っているようできて。

「……痛いとは、なんだろうな」

泣いているようにも、見えた。

※

今日は、よく喋るな。自分のことなのに、どこか他人事のように思うながらも言葉を続けた。

「海に出るだろう。戦っていけば皆傷つく。痛みには表情を歪め、恐怖し、そしてそれに負けぬよう吠える。それが私には、わからない」

戦いには温度があるという。仲間が傷つき、自身が傷つき。大切なものを、自分のことを守ろうと人は必死になる。恐怖に負けぬよう、奮い立つ。その、温度というものが。私にはわからない。

「どんなに大きな傷を負っても気づかない。数値でこれ以上傷ついたらおそらく死ぬのだろうということを理解しても、実感できない」

どうしても、痛みというものがわからない。それを理解しようとしても、どこか、そう。まるで映画のワンシーンを見させられているかのごとく、遠い話のようで。

「……そうしていつしか私について二つ名がautonomous機械 人形だ」

どうしても、理解することができなかった。

「夜はいい、暗闇は私が異常であることを覆い隠してくれる。幸いにグラーフにも夜の適性があった、だから私は夜戦を好んだ」

だから、夜は好きだった。闇夜に溶け込んでしまえば、私も皆と同質になれるような気がしたから。夜戦ができる空母は貴重で、だからこそ期待も集まった。夜は、私が人であることを許してくれるような気がしたのだ。だから、私はこの暗闇の中で生きていくと決めた。ここにいれば、私は私の存在を肯定してもいいのだと。だから、なにも問題はないのだ。だというのに。

「……なぜ、アカギが泣くんのだ」

私の話を聞いて、なぜ貴方はぼろぼろと大粒の涙を溢すのだろう。「だって、あなたの心は、こんなにも傷ついているのだもの」

人の痛みを自分のことのように想い泣く。自分とは対局で、だからこそまったく理解できない存在。

「痛みがわからなくなったら心はあるわ。悲しいと思うことも、寂しいと思うことも」

きつと人の痛みに敏感だからこそ、強くあろうとするのだろう。自分で処理しきれないほどの重責を背負い込み、それで息苦しくなってしまう、不器用な人。

それでも、そこに居続けるのは、きつと優しさだけではない、彼女自身が気づかない強さがあるからだ。

「あなたが私に触れるときは、いつもおっかなびつくりで」

「……力加減が、わからないからな」

「それでいて、いつもどこか寂しそうでした」

彼女は逃げない。わからないものを、わからないなりに理解しよう

とする。どんなに自身が傷ついても、受け止めようとする。不器用な人だと思う、眩しいほどに。

そっと私の手をとって、両手できゅっと握りしめながら、流れ落ちる涙を拭おうともせず、言葉を紡ぐ。

「体温を分かち合えなくても、痛みを分かち合えなくても。……それでもあなたは、人だわ」

そう言って、そうだ、この人はまっすぐに私を見るのだ。

『日本人はシャイだから、ずっと目を見ていられないんですって』

最初はちよつと戸惑っていたけれど。近頃は、私がじつと見つめれば柔らかく笑い返してくれていた。この人は、そういう人なのだ。全てを受けとめようとするのだ、自然体で。

「……最初は」

そうして、気づけば言葉が口をついて出た。

「最初は、特に興味もなかったんだ。参考にしたとはいえ、もう今の私の臙装にその面影はないだろう?」

主語が曖昧な私の言葉を聞いて。それが”赤城”についてなのだと彼女が理解するのに、そんなに時間はかからなかった。

「日本の艦娘なんて、正直どうでもよかった。場所が変わってもやることは変わらない。なにも変わりはない、そう思っていたんだ」

環境が変わったとて。私のこの体質を知らない人達がいる場所に行ったところで、どうせなにも変わらない。人は、わからないものを嫌悪する。どうせ、いつかこの体質もバレる。痛みを理解できない私を、きつと皆理解できない、嫌悪する。だから、私は学んだのだ。

「……本当に、貴方はわからない。他人のことを自分のことのように想い、泣くのも。私に、構ってくるのも。……なにも、わからない、のに」

わからないものには、近づくべきではないのだと。だって、どう頑張ったってそれを理解することは私にはできないし、相手もきつとそうなのだから。だから、適切な距離をとるのが一番いいのだと学んだはずだった。

だからきつと私はおかしくなってしまったのだ。他人を想い泣き、

そして泣き虫の癖に強くあろうとするこの人のことなんか、全然わからないのに。

「わからなくて、いいんですよ」

全然わからないこの人の側を、いつしか離れがたく思ってしまったのだから。

被弾した際に眉ひとつ動かさない自身を、いつしか仲間は気味悪がるようになった。いつからだろう。表情を隠すように。痛みがわからないことを悟られないように、帽子を目深に被るようになったのは。

「同じ日本人だって、同じように痛みを感じる人同士だって、わからないことだらけなもの」

いつしか全身を覆い隠すように服を着こんで。手袋だってそうだが、自身はこの世界と薄い膜一枚で、どうにもならないその薄い薄一枚^{いたみ}で隔てられているのだと言い聞かせるように。

「だから」

そうやって、うまく生きてきたはずだったのに。

「だから、私達はこうやって一緒にいて、言葉を交わすんですよ」

こうやって私に触れる彼女の体温を感じる事ができないことが、今は無性に寂しいと、思ってしまった。

「……そうか」

「言葉を交わして、それでもわからなくなってきたっていいんです。わからないことは、悪いことじゃないわ」

「……実はな」

「はい」

「アカギはコーヒーにミルクと砂糖をたくさん入れるだろう。あれは、理解に苦しむ」

「そうですか。私もグラーフさんのコーヒーに対するこだわりはよくわからないです」

「そうか」

「ええ。でもですね」

そうやって彼女がふわりと笑いかける。

「わからないけれど。嫌いじゃないわ」

ふいに彼女の姿が滲んで見えて。優しく彼女が指先で私の頬をなげたことで、ようやく。

※ 自身が泣いているのだということを、理解した。

たったった、と足早に廊下をかけていく。待ち合わせの時間にはまだ十分に余裕はあるが、あの人は待ち合わせの三十分前にはしれっといて遅いわよ、なんて言うから油断はできない。空母専用の団欒室をひよつこりと覗き込めば、案の定彼女はもうすでにそこにいた。

「――」
珍しいこともあるものだ。無表情、あるいはしかめっ面をしていることの多い彼女がとても穏やかな、まるで何かを慈しむかのような表情をしていた。だから、思わず一步踏み出しながら声をかけてしまった。

「何読んでるの、おねーちゃん」

「……瑞鶴」

途端に彼女顔がしかめっ面へと戻る。いつけない、気が緩むとつい。辺りを見回し、誰もいなかったことにほっと息をつきながら改めて咳払いをして話しかける。今日はこれから一緒に鍛練なのだ、公私混同は厳禁です、とよく小突かれるのでこの外面もそこそこ様になってきた。

「誰からの手紙ですか、加賀さん」

「大切な人からよ」

そして一気にメツキが剥がれ落ちてしまった。

「……へ、へえ〜？ こ、恋人とかあ〜？」

なによその残念な子を見るかのような顔は。一時期に比べれば大分態度は軟化したけれど、今までのやりとりの名残か、昔より私に対する扱いが雑になったような気がしなくもない。

「……大きくなっても子供っぽさは抜けないのね」

「聞こえてるんですけど!!」

「そういうのではないわ。大切な人には違くないけれど」

やれやれ、とため息をついて加賀さんが弓を担いで歩きだす。その後ろを慌ててついていった。

「……私の改二式艦装も近々完成するかもしれないわね」
「え!?!」

「まあ改二式なんてなくても、既に改二式艦装が実装されているのにうまく使いこなせない誰かさんには負けないのだけれど」

「ぐ、ぎぎぎー」

やっぱりこの人ムカつく! ああ、きつと幼い頃の記憶なんて美化されていたのだ。瑞鶴、あなたこんなのに憧れて空母になったのよ。全然優しくなくて嫌みったらしくて、まるで小姑のように小うるさいこんな人に。人生間違えたわよね、まで考えていたら、先を歩いていった加賀さんがふと立ち止まって振り返りながらぼそりと呟いた。

「……いつになったら安心して背中を預けさせてくれるのかしらね」
まあでも最近はやつと可愛いところもあるかもしれない、なんて思ってしまったたりしなかったりすることもなくはないというか。

「……いつでもどんとこい!!」

「残念ながら私に自殺願望はないわ」

「むきいー!!!」

「平常心が足りないわね、五航戦」

「その呼び方やめてってば!」

やっぱ可愛くないわ。今日こそは鍛練でぎったぎたにしてやる、と息巻いてずんずんと彼女の先を足早に行く。

「あ」

「どうしたの」

「ほらほら、見て加賀さん」

そうしてちやうど渡り廊下に差し掛かった頃。ふと視界にとまっていたそれを指差して思わず言葉をもらした。

「桜の蕾だ」

冬の肌を刺すようなきんと冷えた空気も嫌いじゃない。霜柱で盛り上がった土を踏みしめる感触も、桶に張られた薄い氷をつつくのも好きだ。それでも、寒々しい冬を越え、春の息吹が感じられるこの瞬

間はやはり心が踊る。さつきまでのムカムカも忘れて彼女の方に振り返れば。

「もうすぐ春ね」

そう言つて、彼女は柔らかく笑つていて。こちらも釣られるように笑顔を溢したのだった。

※

「賑やかだね」

少しだけ開かれた窓の外から流れ込む喧騒にそう呟くと、鬱陶しそうに彼が答えた。

「祭り好きのうるせーのが増えたからな」

「ああ、彼女の演奏、僕も横須賀に帰る前に少し聞かせて貰おうかな。ちよつと楽しみにしてたんだ」

「好きにしろ」

彼はこういつた行事が嫌いだった。嫌いではあるが必要なものであるということは理解しており、こうして自分は蚊帳の外で不満げに眺めるのが常だった。

「……しかし、こつちをとるとは思つてなかつたなあ」

「そうだな」

彼から受け取った承認済みの、新たな改二式艦装案。天下の一航戦、赤城の改二式案は難航に難航を重ね、そしてその過程で二種類の案に別れていった。

「改二戊、ね」

「夜間航空戦力の増強ができるんだ、こつちとしちやありがたいがな」
「……夜が苦手だった彼女がねえ」

彼女が過同調を悪化させて戦線を一時離れるきつかけとなった夜間襲撃。時間をかけて徐々に回復してきているとはいえ、まさか率先してこちらを選ぶなどと思つてもいかなかった。

「言つただろ。無能はここでは生き残れないってよ」

「まあ、あそこまで過同調をこじらせても戻つてこられた彼女は、まごうことなき”赤城”だろうね。……芯が強くなければ一航戦の適性なんかでるわけがないんだから」

「あれも前の赤城が派手だったからなあ。どいつもこいつも勝手に萎縮しやがって」

「けつと悪態をついてばん、と書類に判子を押す。……しわになっちゃってるなあ。」

「……彼女が戻ってきたのも、この艤装を選んだのも。全部お見通しかい？」

「んなわけあるか。俺はろくに働きもせずだらだらしてるアイツに金払ってる分働いてもらっただけだ。グラーフは赤城をベースにした空母って聞いてたしな」

「……ふーん」

「ンだよ」

「一時棄却されそうになったこの案を差し押さえていた誰かさんは、素直じゃないなあって改めて思っただけ」

「将来を見越したただけだ」

「これ以上つついて彼の機嫌を損ねても面倒くさいし。窓辺に寄って下を見下ろす。ちようど駆逐艦の娘に囲まれながら、ヴァイオリンケースを抱えた女の子が出てきたところだった。それをみてやんややんやと周りの巡洋艦やら戦艦やらの娘達が盛り上がる。」

「……同じ目線で海を眺めてみたいんだとさ」

「え？」

「人の縁つてのは、わからねえな」

「手元の資料に目を落としながら、何の気なしに彼がぼやく。海上交通線の安定化に伴い、アメリカ、ロシア、フランス、イタリアなどの各国から技術提携の打診が続々ときているのだ。面倒くさそうに処理を続けながら彼が言葉を続けた。」

「いつの間にか腐り落ちたり、切れたと思ったらまた繋がったり、思わぬところで繋がっていたり」

「ぞんざいに判子を押しながらそう語る彼の胸のうちはよくわからない。人が嫌いで、それでいて人間関係にさとい彼のこととは。」

「俺は、ただきつかけを与えているにすぎん」

「……ねえ」

「あ？」

「今の僕の縁は、例えるならどんな感じかな？」

『お前の縁、こんがらがった糸みてえ』

提督とは、艦娘に霊力を分け与え、艦隊を指揮する能力をもつ者達の総称だ。だから、人とはちよつと違うものが見える人も少なくはない。彼はオカルト話を嫌ったが、もしかしたら何か人とは違うものが見えているのかもしれないな、と付き合っていくなかで感じることはあった、こと縁に関しては。彼はそのことを決して口にしないし、僕も決して直接的には聞かない。そうやって僕たちはうまく付き合ってきた。

「……機織りの糸みてえだな」

「へえ」

「きれーに編まれた感じの。優秀な秘書艦様のおかげで人間関係大分うまく回せてんじゃねーの、知らねえけどよ」

そうどこか投げやり気味に言って頬杖をつきながら窓の外を見る。

「……めんどくせえ」

「うん？」

「めんどくせえな、人間ってのはよ」

だから嫌いなんだ、と目を細め窓の外を眺めながら、誰に聞かせるでもなく彼が呟く。

「……僕はその面倒くささ、嫌いじゃないけどね」

「そうかよ」

「うん。まあ、だから」

僕らは意外とうまくやっていけてるんじゃないか、と続けると。そうかもなあ、と彼は少しだけ笑いながら煙草の箱を取り出した。

※

冬を越え、日本に来て初めての春を迎えた。呉鎮守府の周囲は鮮やかな桜の花で色づき始め、それに伴ってここに在籍する艦娘達もそわそわとし始めた。この時期は大きなお花見大会がありますから、と言われ、今まさに桜の下でレジャーシートを敷いてどんちゃん騒ぎをしている彼女達を見て、なるほど、これが日本のいわゆるお花見か、と

頷く。

人混みに疲れたので、その喧騒から少し離れたところにあつたベンチに腰掛け、一人桜並木を見上げていた。風に揺られ、はらり、はらりと桜の花びらが降ってくる。桜は散り際が美しいという。そして、それはほんの少しの短い期間でしか見届けることができなない。その短い一瞬を美しいと言い、大事に大事にその刹那を慈しむ日本人の感性は、どこかよく彼女が口にする縁、というものと似たような考え方だと思つた。

袖振り合うも多生の縁。一期一会。色々な日本の慣用句を彼女の口から聞いたものだが、どれもこの長い長い時の中で交わる一瞬の出会いを大事にする、という意味を含んでいた。そういった彼女の精神の根幹を形作るものに、どこかこの桜の美しさは通じているように思えた。

そんなことを考えていたからだろうか。一際強い風が吹き、勢いよく桜の花びらが舞い踊るその先に彼女の姿を捉えて。とても、とても。この世界は、綺麗だな、と。初めてそんなことを、思つてしまつたのは。

※

「ここにいたんですね」

さすがにこのどんちゃん騒ぎは彼女には辛いのではなからうか、と色々な人にもみくちやにされながらも彼女の姿を探していると、ようやく少し離れたところでぼんやりと桜を見上げていた彼女を見つけ、歩み寄つた。少し疲れているようだったけれど、それでもグラーフさんは薄く笑いながらひらり、と手をこちらに振つてくれた。

「うまいものだな」

ちようど先程からヴァイオリンを弾き始めた彼女の演奏を聞いて、ぽつりとグラーフさんが呟く。

「ええ。私、彼女の演奏楽しみにしてたんですよ」

「そうか」

そうして暫く黙つて二人してそれに聞き入る。演奏が終わると、駆逐艦のうちの一人、嵐ちゃんが今度は最近放送されてる戦隊ものの番

組のオープンング弾いてくれよー！ と野次を飛ばした。なにそれー、知らないよ、じゃあ今聞いて弾け！ とぎやあぎやあと揉め始めた彼女達に、萩風ちゃんが慌てて駆け寄った。

規律の厳しい呉鎮守府ではあるけれど、こういった催し物では無礼講とされているため、お祭り好きな駆逐艦の娘達は特によくはしゃいでいた。

「――アカギ」

「はい？」

名前を呼ばれ、振り返る。いつの間にか彼女は立ち上がっていたらしく、ふ、と自身に彼女の影が落ちた。一回り背丈が高い彼女が、ちょうどどこちらに腕を伸ばしたところだった。

「――綺麗だな」

そう、私を見つめながら彼女が溢した瞬間、風がざあと吹いて桜の花びらが舞い踊った。柔らかな日差しが彼女の色素の薄い髪に落ち、きらきらと反射する。そして、なにより、そんなものよりも。

「――」

今まで見た中で、一番柔らかく。彼女が、笑っていたのだ。思わず言葉を失って惚けていると、いつの間にか私の髪についていた桜の花びらをとってくりりと回して、今度はニヤリと意地悪そうな笑みを浮かべる。

「桜の花が、だぞ」

「え？」

何を言われたのか理解できず、今までの会話を反芻する。私は、ただグラーフさんが笑ったことに驚いていただけなのだけれど。あれ、これってもしかして自分のことを綺麗だと言われたと思った自意識過剰な人だと勘違いされたのかしら、と思い至って、慌てて訂正する。

「な、え、違いますー！」

「なにが？」

「だ、だから別に、そういうのでなくて……！」

「そういうの？」

「わかってて言ってますよね？」

「さて。日本語は、ムズカシイからな」

飄々とそんなことを言いながらグラーフさんが歩きだす。慌ててその後ろ姿を追いかけると、前方から今度はアップテンポな音楽が流れてきた。嵐ちゃんはその音を聞いてげらげらと笑い転げ、萩風ちゃんはおろおろし、演奏者である彼女はヤケクソ気味に超絶技巧でなんとかレンジャーのオーブニングを弾いていた。そしてそれを楽しそうに聞いている駆逐艦や、空母、戦艦の人達。

つかの間の、休息。その、穏やかなひとときが。どうしようもなく愛しく思えた。

「D u b i s t s e h r s c h . n .」

「え?」

振り返って私のことを待っていたグラーフさんがそつと呟く。耳慣れない言葉に、思わず聞き返した。

「何て言ったんですか?」

「唐揚げが食べたいな、だ」

「……絶対違いますよね?」

「だし巻き卵でもいい」

「最近私の扱い雑じゃないですか? グラーフさん」

「ふーむ。まあ、夜戦に関しては私のが先輩だしな。敬ってくれて構わないぞ」

「……改二戊艤装、出来上がったら夜道に気をつけてくださいね」

「せめて海で襲ってはもらえないだろうか」

「あら、襲って欲しいなんて大胆」

「……うん、アカギはいい性格をしていると思うぞ」

「おかげさまで」

ほりほりと頭をかくグラーフさんを見上げ、してやったり、という顔をしてやった。

なんとなく。そう、なくなのただけれど。彼女の隣にいるときは、少し肩の力が抜けて自然体でいられるような気がするのだ。やっぱり、皆の期待する一航戦の赤城であろうとするのはどうしたってやめられないけれども。それでも、この人のそばにいるときは、上手に

息をすることができると気がした。

あれから少しだけ変わったことがある。やっぱりまだ皆には知られたくないから、という彼女の意志を尊重して、彼女の体質のことについてはまだ皆には話していない。その代わり、彼女の体質について知っている私と色々なことを試すようになった。

例えば、朝会つたらおはようございます、と声をかけて握手をする。怖々と触れる彼女に、もう少し強くても大丈夫ですよ、と返しながらお話をする。そうやって徐々に徐々に、わからないながらも歩み寄って。彼女は気づいているだろうか、今ではそつと彼女の手を取れば、無意識にちょうどよい力で握り返してくれていることに。

「ねえグラーフさん」

「なんだ？」

彼女と手を繋ぎながらゆっくりと歩いて。桜を見上げながら話しかけた。

「機械人形は、きつとそんな風には笑いませんよ」

わからないものは怖いものではない。わからないものをわからないのだ、と認めること。そして、上手にお互いに心地のよい距離を決めていくこと。きつとそれが人間関係を構築するということで、お互いに全く違う人だろうが、似ている人であろうがきつとそれは変わらないのだ。だって人は一人一人、皆違うのだから。

だからあなただって一人の人間なんですよ、という意味も込めて笑いかけた。

それを聞いた彼女は、暫くきよんとした顔をして。

「……そうかもな」

そう言つて、また柔らかく笑った彼女を見て満足をして。そうして、彼女の手を取りながら皆のもとへと向かったのだった。